

〈原著論文〉

## 中高齢者にみるレクリエーションナルスポーツへの社会化

——全国スポーツ・レクリエーション祭参加者に着目して——

久保和之\* 中山 健\*\*  
北村尚浩\*\*\* 川西正志\*\*\*  
守能信次\*\*\*\*

### Socialization into recreational sport in elderly person

——Focus on the participants of a sport and recreation festival——

Kazuyuki KUBO\*, Takeshi NAKAYAMA\*\*, Takahiro KITAMURA\*\*\*,  
Masashi KAWANISHI\*\*\*, Shinji MORINO\*\*\*\*

#### Abstract

The purpose of this study is to examine and clarify the characteristics of sport socialization of people of middle or advanced age who participated in a sports recreation festival. The sample were participants of the 10th National Sports and Recreation Festival held in Okinawa on November 15 - 18, 1997. We selected four sports (gate ball, ground golf, soft tennis, bowling), considering the typical ages of the participants. The investigation was done by questionnaire and the total number of responses was 576 (a return rate of 51%). Investigation contents were personal attributes, life satisfaction, socialization factor, sports activities, and sports lifestyle. These were analyzed along with sports and sex factors.

The main results of this study were as follows:

- 1) The timing of socialization was different by sport. It is concluded that people tended to play sports which were popular at that time. There are many soft tennis players among the group who started it in the early period. More than 60% of them started playing before 1964. The bowlers follow soft tennis players. There was a bowling boom at the time of economic growth after the oil crisis in Japan. About 40% of the bowlers started bowling in the latter half of the 1960's. About 40% of gateball players started playing in the 1980's. Of the ground golf players, most of them began in the latter half of the 1980's.
- 2) About a half of the respondents experienced sport-transfer. There are some differences by sport and sex.
- 3) There was a different process of sport socialization by sex.

---

\*南山大学 Nanzan University

\*\*中京大学大学院 Graduate School of Physical Education, Chukyo University

\*\*\*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

\*\*\*\*中京大学 Chukyo University

受理日：2001年8月24日

## 1. 緒言

中高齢者の運動・スポーツ大会には文部科学省が主催する「全国スポーツ・レクリエーション祭」及び「全国レクリエーション大会」、厚生労働省の「全国健康福祉祭（ねんりんピック）」などがあり、国民体育大会と同様に各県持ち回りで開催されている。その他にもウォーキング大会やマラソン大会などが全国各地で行われており、中高齢者がレクリエーション活動として参加できる運動・スポーツイベントは増加している。全国スポーツ・レクリエーション祭（以下、スポレク祭）に参加している中高齢者の実態についてはこれまでにいくつか報告されており、一般的特性、活動状況、参加態度、経済負担、スポーツ志向などが明らかにされている<sup>21)</sup>。しかし、SSF笹川スポーツ財団のデータによると定期的に運動・スポーツを行っている高齢者は約25%であり、全体の4人に1人の割合しか実施者がいないのが現状である<sup>22)</sup>。運動不足は生活習慣病を引き起こす一因子であり、適度な運動・スポーツ活動はある種の生活習慣病の予防に効果があることから、活動を行っていない人々をスポーツへ社会化<sup>23)</sup>させることは来る超高齢社会における中高齢者の健康問題に関わる課題である。

スポーツにおける社会化研究は「スポーツへの社会化」と「スポーツによる社会化」に分けられ<sup>13)</sup>、国内外を問わずスポーツへの社会化（Socialization into sport）に関する研究が多く行われている<sup>3) 4) 6) 9)</sup>。

Kenyon & McPherson<sup>13)</sup>はスポーツへの社会化の次元を8つに分類するとともに図1に示す社会的学習理論のモデルによって社会化を説明しており、そこでは多様な個人的属性を持つ学習者が他者との相互行為を通じて社会化環境の中でスポーツの役割や価値を学習していくと考えられている。山口・池田<sup>25)</sup>は国内外のスポーツへの社会化研究の動向を見ており、子ども・成人・一流選手の社会化研究の成果についてまとめているが、高齢者の社会化についての知見は少ない。高齢者のスポーツへの社会化研究について山口<sup>27)</sup>がねんりんピック参加者の社会化過程をスポーツ種目別に分析しており、スポーツへの社会化は種目によって異なり、テニス実施者のスポーツ参与パターンは継続説、ペタンク実施者は再社会化説、ゲートボール実施者ではその両説を支持することを明らかにしている。また、山口・山口<sup>24)</sup>は高齢者のスポーツへの社会化を性別に検討しており、スポーツ実施率や社会化に影響を及ぼす人物は性差があること、また女性は高齢期に入って活動を開始し、男性より配偶者や医者からの影響を受けていないことを明らかにしている。その他、筆者らはメジャー種目及びマイナー種目の社会化過程についての研究を行い、メジャー種目の中でもスポーツ種目による差があり、メジャー種目とマイナー種目では社会化過程が異なることを明らかにしている<sup>18) 19)</sup>。先行研究で取り扱われた種目はほとんどがオリンピック種目であり、レクリエーションスポーツ種目<sup>28)</sup>につ

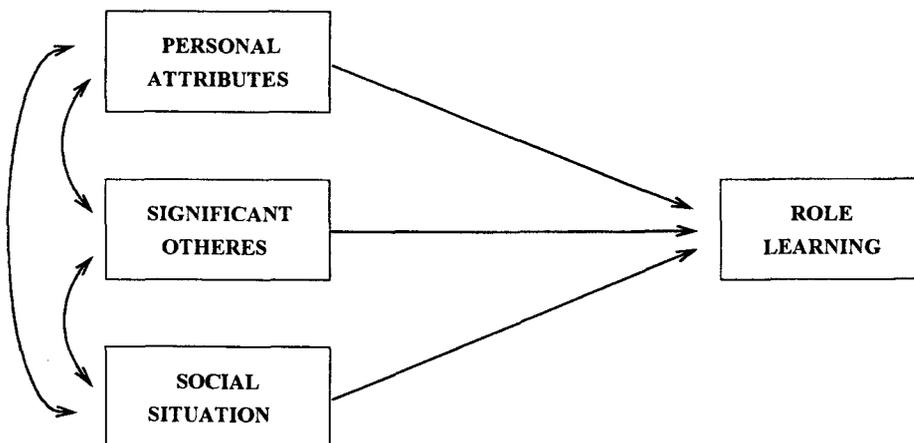


図1 社会化過程の3要素 (Kenyon & Mc Pherson 1973)

いて検討されたものは僅かに山口<sup>27)</sup>が行ったものを除き、皆無に等しいのが現状である。

菊池<sup>15)</sup>によれば社会化による行動変化は広いものと捉えられており、人間行動の構造をモデル化するにあたり、認知・情意・行動という三分法を用いて構造モデルを説明している。その構造モデルから考えるとわが国において行われてきたスポーツへの社会化研究<sup>27) 28)</sup>では、人々は学校体育によってスポーツへ社会化されると捉えられているが、運動・スポーツの規則的実施者数の少なさから言えば、大多数の人が運動・スポーツの技術や知識などしか内面化しておらず、身体活動を継続して実施するという行動までには至っていない。図2は菊池が用いた人間行動の行動モデル構造を基に、これまで考えられてこなかった社会化レベルの概念について表している。人々はまず学校や地域社会という社会化環境の中で受け身的或いは主体的にスポーツに関する情報を入手することにより認知レベルでの社会化がなされる。この段階では個人的属性よりも「社会化環境」が社会化要因として強く作用すると考えられる。認知レベルの社会化に続いて、情意レベルの社会化がなされるが、これは様々な属性を持った個人が多様な社会化環境の中で個人を取り巻く「重要な他者」要因の影響を強く受けて行われる。具体的には体育教師や指導者、家族、友人などの作用を受けてスポーツに対する動機づけや価値づけをすること

である。しかし、すべてが肯定的な情意であるとは限らず、スポーツ嫌い・無関心といった否定的な感情を持つ可能性もある。この場合はスポーツ活動を行うという行動レベルまで到達せず、「反社会化（アンチソシアリゼーション）」された状況と言えよう。情意レベルの次が行動レベルの社会化であり、この段階では個人を取り巻く要因よりむしろスポーツの志向や認識といった「個人的属性」が強く関わると考えられる。スポーツへの社会化を考える際にスポーツへの社会化は「スポーツを行うという行動パターンを身につけること」とすることから行動レベルには至らない情意レベルまでの段階は準社会化<sup>24)</sup>と捉え、行動レベルまで達した段階で完社会化と捉えるのが妥当であろう。定期的な活動実施者が少ないということは、大部分の中高年齢者は運動・スポーツにおいて認知レベルの社会化しか行われておらず、準社会化の状況であるといえる（図2参照）。中高齢者に限らず、実際の健康に深く関連があるのは身体活動の量であり、スポーツは身体活動を伴う行動であることから、機械化の進んだ現代社会において身体活動を行う有効な手段である。日常的に運動・スポーツを実施する高齢者を増加させるには、大多数を占める非実施者を行動レベルまで社会化させることによって定期的な活動実践者の増加が見込まれる。このことから、日常的に身体活動の少ない準社会化状態である者を完全に社会化させる方向へ導

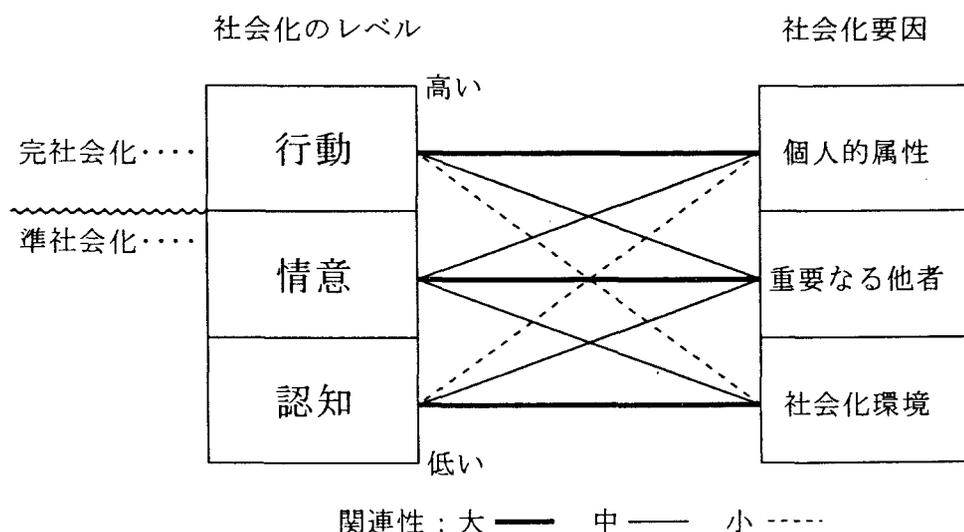


図2 社会化レベルと関連要素

くことは意義のあることだと言えよう。しかし、高齢者のスポーツへの社会化過程に関してはまだ十分な研究の蓄積がなく、どのような種目特性があるのかも知られていない<sup>27)</sup>。そこで、本研究は中高齢者のスポーツへの社会化過程における種目差と性差を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 調査方法

本研究では、1997年11月15日から18日に沖縄県で開催された第10回全国スポーツ・レクリエーション祭の参加者のうち、参加者年齢のばらつきが少ないうえに中高齢者が多い4種目（ゲートボール、グランドゴルフ、ソフトテニス、ボウリング）を選定し、調査を実施した<sup>28)</sup>。調査用紙の配布数は1140部であり、回収数（率）は576（51%）であった。種目別の回収数（率）は表1に示すとおりである。調査内容は属性、スポー

ツキャリア、社会化状況などについてであり、社会化に関する調査項目は山口ら<sup>27)</sup>や久保<sup>18)</sup> 20)<sup>20)</sup>の先行研究を参考に作成した。分析は「スポーツへの社会化はスポーツ種目及び性別によって異なる」という仮説を検証するために種目及び性を独立変数、社会化状況を従属変数としたクロス集計を行った。

### (2) 変数とその操作定義

本研究において取り扱った社会化状況は過去のスポーツ活動、スポーツ活動を開始した際の年齢及び年代（西暦）、影響を受けた人物である。開始時の年齢は実年齢を回答してもらい、現在の年齢を基に開始時の年代を算出した。開始年代は単純集計を行った後、東京オリンピックを一つの基準にサンプル数ができるだけ均等になるようにグルーピングし、6カテゴリーに設定した（表3参照）<sup>29)</sup>。

表1 回収数及び回収率

	回収数	率
ボウリング	158	65.8
ゲートボール	170	56.6
グランドゴルフ	154	51.3
ソフトテニス	94	31.3
合計	576	51

表2 調査内容

要因群	調査項目
属性	1)性別 2)年齢 3)収入 4)最終学歴 5)職業
スポーツキャリア	1)過去のスポーツ活動 2)過去のスポーツ種目
社会化時期	1)開始時の年齢 2)開始時の年代(西暦)
重要な他者	1)影響を受けた人物

表3 変数のカテゴリー

変数	カテゴリー
開始時の年齢	①20歳未満 ②20歳代 ③30歳代 ④40歳代 ⑤50歳代 ⑥60歳代 ⑦70歳以上
開始年代	①1964以前 ②1965-1974 ③1975-1984 ④1985-1989 ⑤1990-1993 ⑥1994-1997
重要な他者	①誰もいない ②友人・知人 ③父親 ④母親 ⑤きょうだい ⑥子供・孫 ⑦有名選手 ⑧体指・教委 ⑨その他

注:⑧体指は体育指導委員、教委は教育委員<sup>注7)</sup>

表4 サンプルの属性

		(%)			
		ゲートボール n=163	ボウリング n=152	クレーンゴルフ n=138	ソフトテニス n=90
性別	男性	66.3	54.6	64.5	64.4
	女性	33.7	45.4	35.5	35.6
年齢	50歳未満	8.3	0.7	15.5	29.1
	50歳代	18.6	46.9	19.0	40.7
	60歳代	46.8	43.4	45.1	29.1
	70歳以上	26.3	9.0	20.4	1.2
収入	200万円未満	17.8	8.5	12.1	1.1
	200-399万円	34.2	23.4	35.6	19.5
	400-599万円	21.3	26.2	25.7	20.7
	600万円以上	26.7	41.9	26.5	58.6
最終学歴	高等小学校	34.9	6.1	20.6	4.5
	新制中学校	13.8	19.6	13.2	2.2
	新制高・旧制中	37.1	52.7	42.6	53.9
	専門学校	9.4	6.1	5.9	4.5
	高专・短大	3.1	4.7	5.1	5.6
	大学	2.5	10.8	12.5	29.2
職業	経営・管理者	17.9	32.8	19.4	29.9
	その他	20.4	33.8	28.0	17.8
	主婦	27.9	27.9	23.8	20.5
	無職	42.4	21.7	27.2	8.7

### 3. 結果及び考察

#### (1) サンプルの属性

サンプルの属性を参加種目別にまとめたのが表4である。性別の割合はどの種目も男性が若干多くなっている。年齢は全種目とも50～60歳代が大半の7割近くを占めているが、ゲートボールとグランドゴルフでは70歳以上の高齢者が、ソフトテニスでは50歳未満の中年者が多くなっている。世帯総収入では種目ごとではばらつきが見られ、ゲートボール実施者の収入が他種目に比べて低く、ソフトテニス実施者が高い傾向を示している。このことは年齢や職業とも関連しており、ゲートボール実施者が退職して無職の者が多いことと関連していると思われる。職業をみるとボウリング及びソフトテニス実施者は他種目より経営・管理者が多く、ゲートボール実施者は無職の者が多く見られ、高齢者の少ないソフトテニス実施者では無職の者があまり見られなかった。

#### (2) 種目別の社会化

##### ① スポーツキャリア

現在のスポーツ種目を始める前のスポーツ活動は種目別で若干の違いがあるものの、全体では約半数の者が「経験あり」としており、スポーツトランスファー（以下、トランスファー<sup>28)</sup>を経験している。種目別にまとめたのが図3である。トランスファー経験が最も少ないのはソフトテニスの34.9%であり、多いのはグランドゴルフの60.6%であった。スポーツキャリアは年齢と関連しているため、何歳の時に活動を始めるかによってトランスファーする割合は変わることが考えられる。少ない種目でも行動レベルまで社会化されていなかった約4割の者が新たに完社会化していることが窺える。

##### ② 開始時期

対象者が現在行っているスポーツの開始年代について種目ごとにまとめたのが表5である。種目によって

表5 種目別開始年代

	(%)			
	ゲートボール n=154	ボウリング n=141	グランドゴルフ n=141	ソフトテニス n=86
1964以前	0.0	12.1	0.0	67.4
1965-1974	1.3	43.3	0.0	9.3
1975-1984	23.4	19.1	1.4	14.0
1985-1989	46.1	9.9	28.4	3.5
1990-1993	22.7	8.5	33.3	4.7
1994-1997	6.5	7.1	36.9	1.2

表6 種目別開始時の年齢

	(%)			
	ゲートボール n=154	ボウリング n=141	グランドゴルフ n=141	ソフトテニス n=86
20歳未満	0.0	5.7	0.0	67.4
20歳代	3.2	18.4	1.4	11.6
30歳代	9.7	34.0	10.6	12.8
40歳代	21.4	27.7	11.3	4.7
50歳代	40.9	10.6	39.7	2.3
60歳代	23.4	3.5	32.6	1.2
70歳以上	1.3	0.0	4.3	0.0

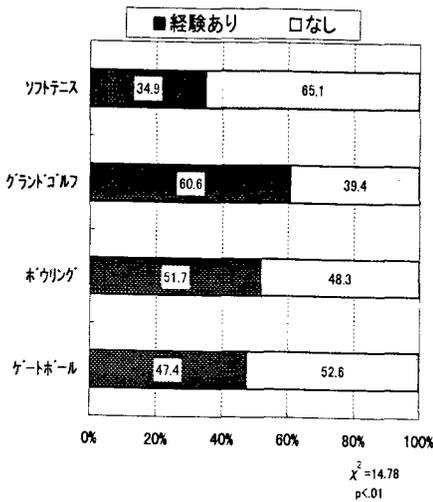


図3 種目別トランスファー経験

開始年代は異なっており、当時の社会で流行していたスポーツが反映しているようである。早い時期に開始した者が多いのはソフトテニスであり、1964年以前に始めた者が6割以上を占めている。これは今回調査した4種目のうちソフトテニスの普及が最も早く、1930年代から国内外を問わず普及活動が行われており、第二次世界大戦後のスポーツ復興とともにソフトテニスの各種大会が開催され、その時期に活動を開始した者が多いことが窺える。

ソフトテニスに続いているのがボウリングであり、オイルショック後の経済成長とともに全国でボウリングブームが起り、その1960年代後半から1970年代の前半に時期に開始した者が約4割を占めている。また、比較的簡単にゲームが行えることからブームが終了した後も開始する者が見られるのではないかと考えられる。

続いてゲートボール参加者は1980年代の後半に開始した者が約4割を占めている。これはゲートボールの全国大会が1979年に開催されるようになったことと関連して1970年代の後半から普及していることが窺える。

グランドゴルフ実施者は全国大会が始まった1980年代の後半から活動を開始した者がほとんどであり、最近になるに連れて増加している傾向が見られる。

現在行っているスポーツ種目を開始した際（完社会

化)の年齢についてまとめたのが表6である。活動の開始年代と関連していることからソフトテニス実施者は低年齢時に開始した者が多く、グランドゴルフ実施者では高齢になって開始した者が多い結果となっている。70歳を過ぎてから開始した者が見られるのはゲートボールとグランドゴルフであった。ゲートボール実施者は20歳以前に開始した者が皆無であり、8割以上が40歳を越えてから開始しており、最も割合が多いのは50歳代に開始した40.9%であった。グランドゴルフ実施者はゲートボール実施者と同様の傾向を示しており、30歳未満の若年時に開始する者が1.4%と非常に少なく、中高齢になって開始している者が多い。特に50歳以上になって開始した者が約7割を占めていた。ボウリング実施者は比較的どの年齢段階でも開始している者が見られ、特に30歳から40歳代の中齢期に開始する者が多く、60歳を越えて開始する者は3.5%しか見られなかった。ソフトテニス実施者は若年時に開始した者が多く見られ、20歳未満で開始した者が約7割を占めており、中年齢及び高齢で開始する者は少なく、50歳以上で開始した者は僅か3.5%のみであった。

### ③ 重要な他者

活動を開始した際に影響を受けた人物についてスポーツ種目別にみたのが表7であり、どの種目も「友人・

知人」から影響を受けた者が最も多かった。しかし、種目別で異なる傾向がみられた。ゲートボール実施者は約7割が「友人・知人」から影響を受けており、続いて誰からも影響を受けていない者が1割強であった。ボウリング実施者は他種目に比べて「友人・知人」から影響を受けた者が少なく、「誰もいない」とした者が多い。これはボウリングが個人種目であるからだと考えられる。また、「夫・妻」及び「子供・孫」から影響を受けている者も他種目より多くみられた。このことは、ボウリングが他の種目に比べて家族で活動することが多いからではないかと考えられる。さらに他種目より「有名選手」の影響が多いのはボウリングブーム時にマスメディアで取り上げられるスター選手の存在が考えられる。グランドゴルフ実施者は他種目ではほとんどみられない体育指導委員や教育委員から影響を受けた者が多く、全体の1割強を占めていた。これは、他の種目よりグランドゴルフの認知度が低いことや開発された時代が遅いことから、体育指導委員や教育委員会による普及活動が行われていることによると考えられる。ソフトテニス実施者は、他種目より「誰もいない」と回答した割合が低く、特に「きょうだい」や「父親」から影響を受けた者が多い。また、「その他」と回答した者が1割弱みられ、表中の重要な他者以外の様々な人物から影響を受けていた。

(3) 性別の社会化

トランスファー経験の有無を性別にまとめたのが図

4である。男性は半数以上の者が現在の活動を開始する前に何らかのスポーツ活動を行っており、トランスファーの経験がない者は44.2%であった。一方、女性ではトランスファー経験者が40.8%、現在の種目を開始する前にはスポーツ活動を行っていなかった者が59.2%であり、性別によってトランスファーの割合が異なっている。これは、女性のスポーツ活動を行う機会が男性に比べて少なかったからではないかと考えられる。

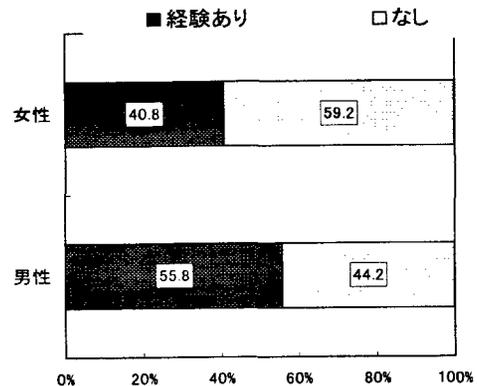
開始時の年齢について性別にまとめたのが図5である。これによると性別によって活動開始時期が異なっており、女性は男性に比べて20歳代に開始する者が少ない。このことは、当時のスポーツ環境が整っていなかったことと女性の多くが20歳代で結婚して家事や出産・育児などを行うことによって活動の機会が減少するからであると思われる。また、男女とも50歳を過ぎて開始している者が4割以上見られるが、60歳以上に限ってみると男性で24.1%、女性9%と高齢で開始する女性が少ない。このことは、高齢女性の身体能力的なことも考えられるが、それより活動する場所や機会などのソフト面が充実していないことが考えられる。

続いて性別の重要な他者をまとめた表8をみると、男女とも「友人・知人」から影響を受けた者が最も多く、半数以上を占めていた。続いて多く見られるのが「誰もいない」であり、活動を開始する際に誰からも影響を受けなかった者が男女とも約15%ほど見られた。その他は、「家族」「有名選手」「体育指導委員」「教育

表7 種目別重要な他者

	(%)			
	ゲートボール n=156	ボウリング n=145	グランドゴルフ n=142	ソフトテニス n=86
友人・知人	71.2	49.0	65.5	55.8
誰もいない	14.7	25.5	12.7	9.3
夫・妻	3.2	11.0	3.5	1.2
きょうだい	0.6	2.1	2.1	15.1
父親	3.8	0.0	0.0	8.1
母親	2.6	0.0	0.7	1.2
有名選手	1.3	5.5	0.0	1.2
体指・教委	0.0	1.4	14.1	0.0
子供・孫	0.6	4.8	0.0	0.0
その他	1.9	0.7	1.4	8.1

注：体指は体育指導委員、教委は教育委員



$\chi^2 = 11.21$   
 $p < .001$

図4 性別トランスファー経験

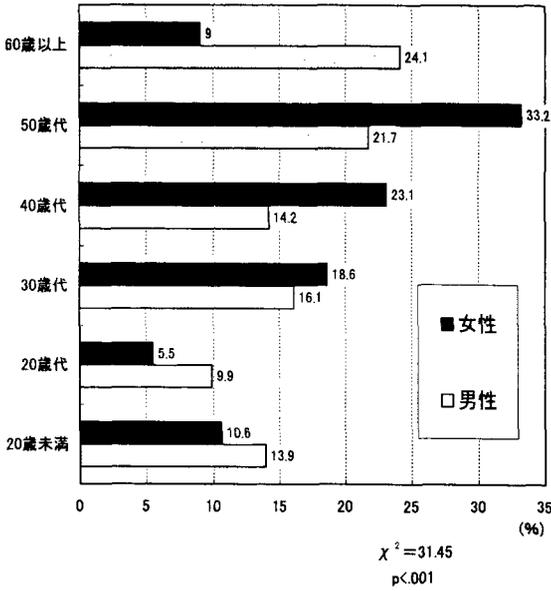


図5 性別開始時年齢<sup>注9)</sup>

委員」などから影響を受けている。男性は女性に比べて「友人・知人」から影響を受けている者が1割程度多く、配偶者(妻)から影響を受けた者が少ない。反対に女性は男性よりも配偶者(夫)から影響を受けている者が多い。その他の他者に関しては性別による差はほとんど見受けられなかった。

表8 重要な他者(性別)

	(%)	
	男性 n=328	女性 n=201
友人・知人	65.5	53.7
誰もいない	16.5	15.9
夫・妻	2.1	10.0
きょうだい	3.7	4.0
父親	2.1	3.0
母親	0.6	2.0
有名選手	1.5	3.0
体指・教委	4.3	4.0
子供・孫	0.9	2.5
その他	2.7	2.0

注：体指は体育指導委員、教委は教育委員

#### 4. 論議

まず、スポーツ種目による社会化の違いであるが、先行研究<sup>18) 26)</sup>と同様にレクリエーションスポーツにおいても図6に示すよう種目によって活動開始年代や開始年齢が異なっている。これは、スポーツへの社会化が社会学習モデルの一要素である「社会化状況

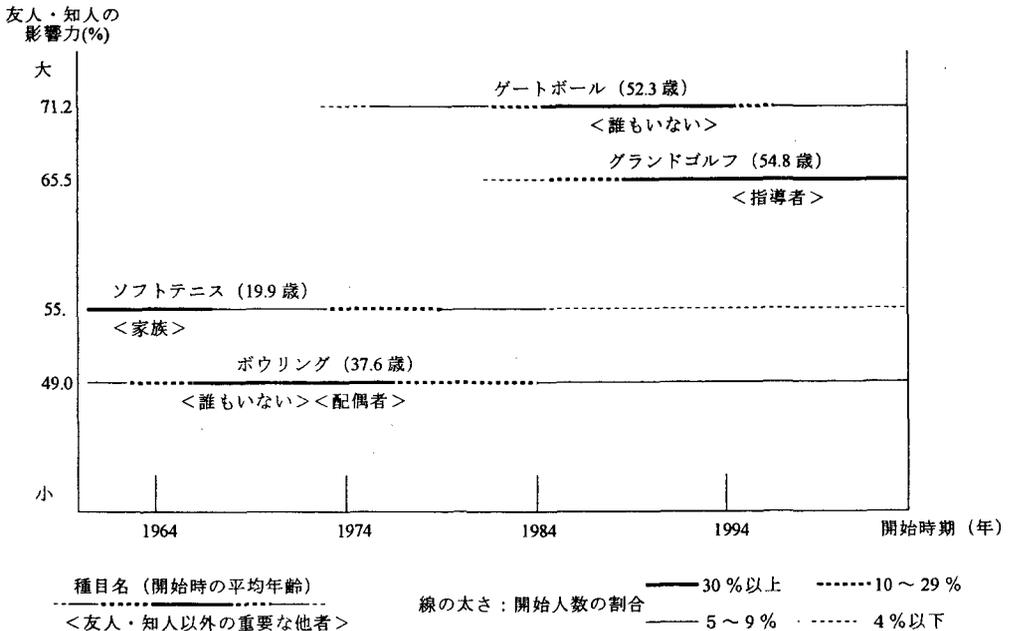


図6 種目別社会化状況

(Socialization situation)」の影響を受けているからであると考えられる。時代とともに社会は変化していることから、社会化状況（環境）も変化しており、人々はそれぞれの時代で流行するスポーツに社会化されやすいと考えられる。社会化レベルでいえば、認知レベルの社会化が行われる際には住んでいる社会環境の影響を強く受けるからであり、例えば戦前のソフトテニス、戦後のボウリング、東洋の魔女によるバレーボール、キャプテン翼<sup>⑩</sup>やJリーグによるサッカー、スラムダンク<sup>⑪</sup>やNBAによるバスケットボールなどがブームになり、その影響を受けて活動を開始する者が多いことが考えられる。また、スポーツ種目によって重要な他者が異なることについては、種目の活動開始年齢に関連していると考えられる。しかし、半数以上の者が中高齢期に活動を始めるゲートボールとグランドゴルフでは開始時期がほぼ同じでありながら、影響を及ぼす重要な他者が異なる傾向がみられた。このことから、やはりスポーツ種目による社会化過程の差があることが窺える。種目による他者の違いは、学習者を取り巻く環境が影響していると考えられ、無職の者が多いゲートボール参加者は有職の者が多いグランドゴルフ実施者より日常生活で友人・知人以外の人物と接する機会が少ないことから、ほとんどの者が友人・知人の影響を受けて活動を開始している。以上のことから、仮説「スポーツへの社会化は種目によって異なる」は支持されたと言える。

続いて性別の社会化についてであるが、これまでの研究<sup>④⑤⑥</sup>と同様にスポーツへの社会化には性差があることが示され、「スポーツへの社会化は性別によって異なる」という仮説も支持された。開始時の年齢では特に40歳代と60歳以上において顕著な差がみられ、40歳を過ぎて育児を終了した女性が活動を始めたことと、60歳を過ぎた高齢の女性があまり活動を始めていないことが窺える。このことは性別のライフサイクルに違いがあることと高齢女性用のスポーツプログラムやハードが整っていないという社会化環境が原因でないかと考えられる。開始時の重要な他者についても性別で異なる傾向が見られた。男性は女性に比べて友人・知人の影響を受けている者が多く、女性は男性に比べて配偶者（夫）の影響を受けている者が多く見られた。そのほか子どもや孫からの影響を受けている者は女性の方が若干多い結果であった。このこと

も学習者を取り巻く環境の違いと考えられ、女性は職業とも関連して男性に比して家の中にいることが多く、配偶者以外の人物と交流する機会が少ないためではないかと考えられる。また、トランスファー経験の有無についても性別で異なり、プログラムや活動の機会が少なかったと思われる女性の方が、トランスファー経験者が少なかった。

## 5. まとめ

本研究では中高齢者のスポーツへの社会化を種目別あるいは性別に検証し特性を明らかにすることを目的として1997年に開催された全国スポーツ・レクリエーション祭参加者（ゲートボール、グランドゴルフ、ソフトテニス、ボウリングに出場した者）を対象に質問紙調査を行った。その結果、スポーツへの社会化における性差と種目差において先行研究と同様の差が認められ、性や種目によってスポーツへの社会化過程が異なるという説が支持された。スポーツ種目別では、ゲートボール及びグランドゴルフ実施者は高齢期に社会化した者が多く、ソフトテニス実施者の多くは若年期に完社会化していた。また、ボウリング実施者では若年期から高齢期にわたり完社会化していることが明らかになった。このことから結論として、ボウリングやゲートボール、グランドゴルフといった気軽にできるスポーツは高齢者が容易に行動レベルまで社会化することができ、運動・スポーツ活動を行っていない高齢者がスポーツへ参与する場合に望ましい種目であると言える。

中高齢者でもトランスファーを経験していないということは行動レベルまで社会化させていない準社会化の状態であった者が、何らかの要因を受けて行動レベルまで社会化されているということである。我が国の現状では情意レベルの社会化まではほとんどの人が学校教育というシステムや住んでいる地域社会を通じて到達することができるであろう。今後の課題としては認知レベルや情意レベルへの社会化状況を明らかにするとともに、準社会化の者がどういった要因で完社会化されるのか、或いは社会化レベル別での要因分析があげられる。また、スポーツ種目によって完社会化される時期が異なることから、社会化過程に影響を及ぼすのは種目特性であるのか開始時期であるのか、同種目内での比較や他のスポーツ種目も含めた詳細な分析が必

要であろう。

## 注

注1：日本体育協会スポーツ科学班は第4回大会参加者の調査を行い、一般的特性、活動状況、価値観、キャリアパターン、活動に関する悩みを明らかにしている<sup>21)</sup>。また、山口ら<sup>28)</sup>は第6回大会参加者に質問紙調査を行い、参加者の参加態度、経済負担、大会評価、観光活動、再来志向、スポーツ経験について分析している。そこでは、参加者は少年期におけるスポーツ実施頻度と、50歳以降の運動・スポーツ実施頻度も高いことからアクティブなライフスタイルであることやスポーツへ再社会化している者が多いことを明らかにしている。一方、北村<sup>6)</sup>は1994年に行われた第7回大会参加者のスポーツ志向について分析しており、「マイペース型」「多目的・多志向型」「スポーツクラブ型」「余暇充実型」の志向に分類できることを報告している。

注2：社会学事典によれば社会化は「個人がさまざまな他者との相互的なやりとりを通して社会的なアイデンティティや役割を形成し、社会的な存在となる過程である」<sup>7)</sup>とされていることから、スポーツへの社会化は「個人が他者との相互行為を通してスポーツにおける役割や諸資質・技術、あるいは価値・規範などを獲得しスポーツを行うという行動パターンを発達させ、身につけること」と解釈することができる。

注3：本研究ではレクリエーションスポーツとはオリンピックで行われていない種目であり、中高齢者でも行えるスポーツ種目とした。

注4：スポーツへの社会化において、「認知」「情意」「行動」という社会化レベルを想定し、実際に定期的にスポーツ活動を定期的実施するという行動レベルまで社会化した場合を「完社会化」と捉え、行動レベルまでには達しない「情意」レベル、「認知」レベルまでの段階は「準社会化」の状態であると捉える。「準社会化」とはスポーツに対して肯定的な態度を示し、スポーツに関する知識や情報は身につけており、スポーツに対する思い入れはあるものの、定期的には活動を行っていない状態である。本研究における社会化とは、スポーツに対して肯定的な認知や情意、行動であり、無関心・スポーツ嫌い、非実施といった否定的な態度は「反社会化」と捉える。

注5：本研究における調査は「スポレク祭参加者の健康と生活に関する調査プロジェクト（代表：川西正志）」の一部として行われた。調査はまず、実行委員会から調査の承諾を得た後、各種日別大会の責任者と連絡を取り、大会前日の監督者会議において調査の依頼を行った。ボーリング大会の参加者については監督者会議において各県の代表者に選手人数分の調査用紙を手渡し、宿泊先にて配布・記入してもらい当日の大会会場にて調査員が収集した。その他の3種目については、大会会場にて調査員が選手の控え場所に出向き、調査用紙を配布し回収する留め置き法を用いた。

注6：グルーピングする際に10年を目安に設定したところ、1985年以降にサンプル数が集中したため、1989年で区切りそれ以降の1990年代を二つに分けて分析を行った。

注7：質問紙では重要な他者に関する設問のうち体育指導委員と教育委員の項目は含まれていなかったが、「その他」の項目で具体的に「体育指導委員」「教育委員」と回答した者が複数見られたため変数の一つとして分析を行った。

注8：スポーツトランスファーとは、あるスポーツを中止したけれども新たに異なる次元でそのスポーツを再開する、もしくは他種目のスポーツ活動を開始することである（Klint & Weiss 1986）。

注9：70歳以上に開始した者は女性には見られず、男性でも僅か1%強であったため、分析では60歳以上のグループに含めた。

注10：週間漫画雑誌（少年ジャンプ）に掲載され、テレビ放映や映画化された人気漫画。

## 引用・参考文献

- 1) 長ヶ原誠、川西正志、北村尚浩、マスターズスイマーのスポーツ継続パターンとライフスタイル、Leisure & Recreation, 第12号, pp 34-41, 1990.
- 2) 長ヶ原誠、山口泰雄、池田勝、高齢者のスポーツ活動における再社会化説と継続説の検討、日本体育学会第41回大会号A, p 133, 1990.
- 3) 海老原修、スポーツ社会化における成果と課題、体育・スポーツ社会学研究10, pp 153-171, 道徳書院, 1991.
- 4) 江刺正吾、一流競技者のスポーツへの社会化にみられる性差とその規定要因の検討、一流競技者の社会

- 学, pp 1-34, 道和書院, 1981.
- 5) 藤本淳也、原田宗彦, 中高齢者の余暇活動参加パターンに関する研究—特に定年退職予定者の余暇活動について—, レクリエーション研究, 第24号, pp 1-8, 1993.
- 6) Greendorfer, S.L. and Ewing, M.E., "Race and gender differences in children's socialization into sport." *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 52(3), pp 301-310, 1981.
- 7) 濱島 朗ら, 社会学小辞典 増補版, 有斐閣, 1985.
- 8) 原田宗彦、長積仁, 高齢者のスポーツ参加に関する縦断的研究, *Leisure & Recreation* 第7号, pp 2-9, 1990.
- 9) 飯島俊明, 一流競技者の社会化と性格、特に性差についての考察—陸上競技と体操競技の場合—, 一流競技者の社会学. pp 35-48, 道和書院, 1981.
- 10) 岩本真代, 高齢者スポーツの普及と参加者の意識—ゲートボールの場合—, *体育の科学* Vol.37, pp 667-670, 1987.
- 11) 岩岡研典, マスターズ・スポーツ「高齢者とスポーツ」, pp 195-215, 東京大学出版会, 1986.
- 12) 嘉戸 脩ほか, 中高年のスポーツ参加をめぐる多様化と組織化に関する社会学的研究—第1報—, 平成8年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告書, No., pp1-75. 1997.
- 13) Kenyon, G.S. and McPherson, B.D., *Becoming involved in physical activity and sport; a process of socialization*, pp 303-332., N.Y. Academic Press, 1973.
- 14) Kenyon, G.S. & McPherson, B.D., *Socialization Theory and research; toward a "New Wave"*, pp 111-134, Human Kinetics, 1986.
- 15) 菊池章夫, 社会化の問題, 社会化の心理学ハンドブック, 齊藤耕治・菊池章夫編著, 川島書店, 第1章 pp 1-13, 1990.
- 16) 北村尚浩ほか, スポーツ参加者の類型化に関する研究—スポーツに対する志向から—, 鹿屋体育大学研究紀要, 第15号, pp 33-40, 1996.
- 17) 久保和之ほか, 女性マスターズスイマーの社会化パターン. 日本体育学会第44回大会体育社会学専門分科会発表論文集, 1993.
- 18) 久保和之ほか, 一流競技選手の社会化と継続要因に関する研究. 日本体育学会第45回大会体育社会学専門分科会発表論文集, 1994.
- 19) 久保和之ほか, マイナー競技種目への社会化—実業団ホッケー選手に着目して—, 中京大学体育学論叢, 第38巻2号, pp 37-43, 1997.
- 20) 久保和之ほか, ホッケー選手の社会化過程—活動開始時期に着目して—, 東海保健体育科学, 19巻, pp 25-32, 1997.
- 21) 長見 真ほか, 中高年者のスポーツ参加に関する研究—中高年者のスポーツキャリアパターンについて—, 日本体育学会第44回大会体育社会学専門分科会発表論文集, 1993.
- 22) S S F 笹川スポーツ財団, スポーツ白書, S S F 笹川スポーツ財団, 1996.
- 23) Smith, M.D., "Getting involved in sport: sex differences.", *International Review of Sport Sociology*, 14(2), pp 93-101, 1979.
- 24) 山口雅子、山口泰雄, 性差からみた高齢者のスポーツへの社会化に関する研究, *体育・スポーツ科学*, 第3号, pp 23-32, 1994.
- 25) 山口泰雄, 池田 勝, スポーツの社会化, *体育の科学*, 37(2), pp 142-148, 1987.
- 26) 山口泰雄, 高齢者のスポーツ活動とその生活構造, *体育の科学*, Vol.38, pp 507-513, 1988.
- 27) 山口泰雄、野川春夫, 種目別に見た“ねりんピック”参加者のイベント評価と社会化過程, *体育・スポーツ科学*, 第2号, pp 43-53, 1993.
- 28) 山口泰雄ほか, 中高齢者のスポーツへの再社会化に関する研究, 平成5年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書. 1994.
- 29) 綿 祐二ほか, 高齢者のキャリアと余暇活動に関する研究, 東京都立大学体育学研究第18号, pp 1-8, 1993.